

6.1.3 学生の受け入れ

<2003 年度に設定した目標>

1. 多様性を確保するための入試制度の在り方の検討

「学生の多様性と質の確保」を目指し、入学定員に占める一般入試（センター利用入試を含む）の入学者とその他の入試の入学者の比率を6対4とする。

2. AO入試の新設

3. スポーツ能力及び文化・芸術活動に優れた者を対象にした入試の充実

【評価項目5-0-1】 入学者受け入れ方針等

（必須要素）入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

（必須要素）入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

（選択要素）学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

（現状の説明）

本学部の教育理念・目的は、“Mastery for Service（奉仕のための練達）”というスクールモットーにもとづく国際的な舞台で活躍できるビジネス・パーソンの育成である。

本学部の入学者受け入れ方針は、以上の教育理念・目的に基づいて決められており、幅広い関心と鋭い問題意識を有し、社会のさまざまな領域で、その能力を十分に発揮できる人材を育て上げるために、意欲に満ちあふれ、さまざまな適性を有した多様で幅広い学生たちを受け入れることを基本的としている。

2003年度の全学的な入試制度の見直しにおいて、「学生の多様性と質の確保」を目指すために、一般入試（大学入試センター試験を含む）とその他の入試の募集人員の割合が6対4（さらにその実現後は5対5を最終目標とする）とする方針が承認され、2006年度からの新課程入試に向けて本学部で検討が進められている。多様性の確保のためには、多様な形態の入試を実施することが求められる。本学部ではすでに、指定校推薦入試、帰国生徒入試、外国人留学生入試、スポーツ能力に優れた者を対象とする特別推薦入試などを実施しており、さらに2005年度入試からAO入試を導入した。

（点検・評価の結果）

従来の入試制度はほぼ円滑に効果をあげていると思われるが、AO入試に関しては制度の定期的なカテゴリー（採用枠）などの見直しを行う必要がある。

（改善の具体的方策）

AO入試制度（カテゴリーなど）の定期的な見直しや、入学者のその後の成績等の追跡調査を実施する。

【評価項目 5-0-2】 学生募集方法、入学者選抜方法

（必須要素）大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

(現状の説明)

本学部には、一般入試（A・F日程入試、センター試験利用）、関西学院高等部推薦入学、指定校推薦入学、協定校推薦入学、AO（アドミッション・オフィス）入試、スポーツ推薦入試、帰国生徒対象入試、社会人入試、外国人留学生入試の9種類の入試制度がある。

1. 一般入試

入試課と協力して実施している。入学者の選抜は、英語、国語、および数学・日本史・世界史の中から1科目選択、合計3科目の総合得点で判定される。学部独自の広報は行っていない。

2. 高等部推薦入学

本学高等部からの推薦者を面接し入学させている（2005年度80名入学）。

3. 指定校推薦入学

評定平均値4.0以上。過去の実績等に基づき依頼校を決定し、募集人員枠は95名であるが、2004年度107名が入学。面接を行っている。

4. 協定校推薦入学

本学と協定のある高等学校へ推薦を依頼し、面接を行っている（2005年度 3名入学）。

5. AO入試

2005年度は80名募集に対し、60名の入学を許可した。

6. スポーツ推薦入試

評定平均値3.3以上。30名の募集人員で、競技を指定しているA種目（4種目計15名）と、指定していないB種目（計15名）で選抜を行っている。選抜は、競技成績と小論文、面接の成績によって行っている。

7. 帰国生徒対象入試

若干名を募集し、小論文と英語試験、面接によって選抜している。

8. 社会人入試

AO入試の枠文で実施している。

9. 外国人留学生入試

若干名を募集し、英・仏・独語から1科目選択の筆記試験と日本語試験を行い、面接によって選抜している。

(点検・評価の結果)

従来の募集方法は、妥当なものであると思われるが、AO入試に関連してはカテゴリーなどの見直しが必要である。

(改善の具体的方策)

次年度のAO入試に関する募集人員とカテゴリーの見直しを行う必要がある。詳細は「評価項目 5-0-5」で述べる。

【評価項目 5-0-3】 入学者選抜の仕組み

(必須要素) 入学者選抜試験実施体制の適切性

(必須要素) 入学者選抜基準の透明性

(選択要素) 入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

(現状の説明)

入学試験の実施については、入試部が主導する全学的な体制の下で行っており、透明性・適切性は確保されている。「I 全学に関する事項」の「3 学生の受け入れ」の「評価項目 5-0-3 入学者選抜の仕組み」を参照)

【評価項目 5-0-5】 アドミSSIONズ・オフィス入試

(選択要素) アドミSSIONズ・オフィス入試実施の実効性

(現状の説明)

2005年度として実施された募集のカテゴリーは以下のようなものである

- ① 文化、芸術、スポーツ活動で高い評価を得た者。
- ② 能力、技術で高度な資格や水準を有し、高い評価を得た者。
- ③ 社会的な奉仕活動で実績を持つ者。
- ④ 創造的、積極的な学習姿勢を持ち、学業優秀な者。
- ⑤ 指導的役割を積極的に果たし、学業、人物に優れた者。

募集人数は80名であるのに対し、60名の入学を許可した。

(点検・評価の結果)

初年度にもかかわらず、ある程度の成果があったと思われるが、現行のカテゴリー②の資格や水準に関する基準がやや不明瞭と思われるため、カテゴリーの再編を含めてさらに見直しを行う必要がある。

(改善の具体的方策)

2005年度AO入試のカテゴリーの見直しを実施し、資格を有する受験者のうち、その曖昧性をなくすために商業関連の有資格者の枠をAO入試から切り離し、指定校推薦入試へ移動する。さらに、2006年度入試は以下のようなカテゴリーで募集を行う。

- ① 文化・芸術活動で高い評価を得た者
- ② スポーツ活動で高い評価を得た者
- ③ 能力、技術で高度な資格や水準を有し、高い評価を得た者
- ④ 学内外で指導的役割を果たした者。または社会的な奉仕活動の実績をもつ者
- ⑤ 創造的、積極的な学習姿勢を持ち、その成果や今後の計画をプレゼンテーションできる者

【評価項目 5-0-7】 入学者選抜における高・大の連携

(選択要素) 推薦入学における、高等学校との関係の適切性

(選択要素) 入学者選抜における、高等学校の「調査表」の位置づけ

(選択要素) 高校生に対して行う進路相談・指導、その他これに関わる情報伝達の適切性

(現状の説明)

指定校推薦については、過去4年間の入学実績などに基づいて高校を選定している。

また、本学部で行っている高校と大学の連携プログラムとしては以下のものがあげられる。

1. 高等部での授業開講（2000年度会計学。2001年度、2002年度、2003年度、2004年度商学入門を1学期と2学期に開講）。
2. 高校の生徒の授業聴講（2004年度 大阪女学院高等学校、県立御影高等学校、県立星陵高等学校、県立芦屋高等学校の4校を受け入れ）
3. 依頼のあった高校での出張模擬講義の実施（2004年度 兵庫県立東播磨高等学校、県立西宮高等学校、県立柏原高等学校、鳥取中央育英高等学校、県立小野高等学校の5校）。
4. 指定校を訪問し、進路指導担当の教員に対して学部説明の実施（2004年度7校、兵庫県立国際高等学校、兵庫県立尼崎稲園高等学校、兵庫県立須磨友が丘高等学校、市立姫路高等学校、松蔭高等学校、金光八尾高等学校、福岡県立明善高等高校）。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

上記の1から4の連携プログラムはそれなりの成果をあげてきているものと思われる。特に、指定校を訪問した際などには高校側から入試に関する細かい問い合わせが多数あり、有意義な情報伝達・意見交換の方法となっている。

高大連携生受け入れを2005年度から実施した。具体的には、関西学院高等部16名、兵庫県立西宮香風高等学校1名、兵庫県立須磨友が丘高等学校1名、合計18名を受け入れた。

高大連携による学生受け入れのさらなる拡大・充実をめざす。

【評価項目 5-0-9】 科目等履修生、聴講生等

(選択要素) 科目等履修生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

(現状の説明)

科目等履修生に関して商学部では、履修者数の制限のない専門教育科目の受講を認めている。選考は、小論文を含む書類を提出してもらい、面接をおこなっている。定期試験に合格した授業科目について、単位を認定している。2004年度の実績は、教職免許取得のための科目等履修生が6名であった。また、聴講生に関しても履修者数の制限のない専門教育科目の受講を認めている。聴講許可は、面接に合格した者としており、2004年度の実績はなかった。なお、聴講できる単位数は一学期につき12単位以内である。また、聴講許可の単位を修得することはできないが、聴講科目の定期試験に合格し、本人の願い出があれば「聴講成績証明書」を発行している。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

科目等履修生、聴講生に関する2004年度の実績から、履修者数が少ないと思われるが、制度としては適切である。

【評価項目 5-0-10】 外国人留学生の受け入れ

(選択要素) 留学生の本国地での大学教育、大学前教育の内容・質の認定の上に立った学生受け入れ・単位認定の適切性

(現状の説明)

商学部では、日本語と、英語・フランス語・ドイツ語のうち1科目選択の筆記試験と面接によって合否を決定している。近年の実績では、50名程度の受験生に対し、10名程度が合格している。新学期初めに新生と在學生との昼食を取りながらの懇談会を行い、新生に対する一種の学生生活のためのガイダンスとして役立っている。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

上記のガイダンスは不安を抱えた新生に対して有意義である。また、履修指導については学部スタッフがサポートしており円滑に実施されている。これは商学部の留学生受け入れについて評価できるポイントである。さらに、学業についても一般学生と遜色はなく、よってこの入試制度は適切である。